

## 「熱海の森」に芽生えた植物

光が入り明るくなった森では、予想もしなかった奇跡のようなことが起こりました。沢山の樹木や草本の実生が育ち始めたのです。まだ種類が同定されていない野性の蘭さえも芽生えていたのでした。確認できただけで、50数種類もの植物がありました。



### 認定NPO法人環境リレーションズ研究所：理事長 鈴木敦子

「PresentTree from 熱海の森」が、明るい森へと変貌をとげつつあります。この森は、外資による日本の森林買収が頻繁に報道された頃、放置山林の引受先として当所に様々な相談が来た内のひとつで、保安林を含むこのあたり一帯が、長年放置され続けてきました。長い歴史の中で、日本人は森と共に暮らしてきた時代が長く、日本では原生林に代表されるような「人の手を入れない方がよい森」はわずかで、多くの森は、林業のための人工林も生活のための里山も、人が関与することでその公益的機能を保っています。ところが、ここわずか半世紀あまりの間に、経済社会環境の変化と共に日本人の森への興味はどんどん失われて、全国各地で放置人工林や放置里山が拡がっており、ここ熱海市では林業が衰退し続けとう林業家が絶滅、故に森林組合も森林行政窓口も無くなってしまいました。そこで、行政からも見放された大切なこの熱海の保安林を私共 NPO で所有し、2010 年から森林再活動を実施しています。生物多様性の失われた暗く荒廃した森の公益的機能を回復し、地元振興につながる明るい里山に再生させようとするこの取組が全国のロールモデルとなるよう、皆様からの今後益々のご支援をお願い申し上げます。



### 「熱海の森」フォレストマネージャー：(合) フォレストウォーカー代表 佐藤憲隆

真っ暗で下草も無い状態から始まった私たちの森林整備活動。鹿の食害を受けずに生き延びた、シキミなどの小径木の除伐が最初の作業でした。生きている木を伐採することに多少のためらいはありましたが、豊かな森を目指すんだと自分に言い聞かせながら、私たちは作業を続行したのです。今、森に光が入って、森は蘇りつつあります。下草も生えてきて、野鳥や昆虫類も見掛けるようになりました。そして、半世紀以上も前の炭焼き道が残っており、今はけもの道として利用されているのも目の当たりにしました。先人が残してくれた豊かな森、里山は、私たちが関わることによって、持続してゆくのです。そして、その森の豊かさは、日本人の心の原風景として、ずっと存在し続けるに違いありません。



## Present Tree とは



プレゼントツリーは「人生の記念日に樹を植えよう！」を合言葉に、大切な人や自分自身のために記念樹を植えて、森林再生と地域振興につなげるプロジェクトです。都市の人びとに苗木の里親になってもらい、その苗木を介して縁のできた中山間地域との交流人口を増やすことによって、森だけでなく地域も元気にしていきます。植えた苗木には1本1本ナンバープレートが付けられ、10年間森になるまで大切に育てます。苗木の里親になった方には、ナンバープレートの番号が記された「植林証明書」と贈り主からのメッセージカードが届きます。2014年4月現在、植栽地は国内外に23ヶ所、植樹本数は約9万6千本、参加人数は約290万人にのぼります。「熱海の森」は、2013年4月から「Present Tree from 熱海の森」として、プレゼントツリーのお申込みを受付けています。

## 活動報告書



この報告書は（公社）国土緑水推進機構の緑の募金を活用し作成しています

# 私たちが「Present Tree from 热海の森」でめざすもの

## 热海の森は里山だった！

热海の森を歩いてみると、コナラの分布が多く、沢沿いには炭を焼いた跡の石積みや木炭の破片が散乱している場所があちこちに見られ、かつては広汎に木炭が生産されたことがわかります。このような山村の生活や生産に密着した森を里山と呼びます。千年以上も前から先人が作り上げ利用してきた里山こそが、有形にも無形にも豊かな森の恵みを私たちに与え続けてきました。

この豊かな森が放置され、急速に暗い不毛な森への道を歩き始めたのは、1960年代、今から半世紀ほど前のことでした。薪や木炭あるいは肥料としての落葉などが不要になった、便利な生活への転換がその始まりでした。鹿の害も森の荒廃に輪をかけ、暗く不毛な森がいたるところに出現したのです。

### 里山は人びとの生活の原点だった!!



### 人々が去った里山は？



## 里山を取り戻せ！

人びとの生活に密着してきた里山が、物質的なメリットが無くなったという理由で、半世紀ほどの間に放棄され、荒れ果ててゆく……。実は里山は、もっと大事な基本的な森の機能を、無償で私たちに与え続けてきたのです。これを森林の公益的機能と呼び、それらは以下のよう�습니다。

①大気中の二酸化炭素を吸収し酸素を放出する（光合成作用）、②豊かな水を貯留し穏やかに供給する、③洪水や土砂災害を防止する、④風、波、砂、ホコリなどを防いで生活環境を守る、⑤下流の海に豊かな漁場を提供する（森は海の恋人）、⑥景観や五感を通じて私たちに癒しと快適の空間を提供してくれる、⑦生物多様性を向上させる。

## New Satoyama Paradise



## 「热海の森」がめざすもの

私たちにとっても、多くの生物たちにとっても、パラダイスと呼べるような素晴らしい森を作りあげ、再生させるために、次のような三つの戦略が必要です。

- ①里山の基本的機能をしっかりと認識してそれを守ってゆく戦略（里山の基盤整備）
- ②里山の持つソフトパワー（森の空間としての存在感や訴求感）を現代人向けに活用してゆく戦略
- ③かっての里山の恵みを、経済原理だけで評価するのではなく、現代人のニーズに合わせて復活させ、活用する戦略

森は陸上生物のゆりかご、生命の源泉であることをしっかりと認識して、身近な里山を持続的に守り育ててゆくことが大事なのです。

## 活動の記録



### 所在地：

静岡県热海市下多賀字弁慶嵐。土砂流出防備保安林指定の山林約7.5ha。热海仲川の中流左岸（北岸）に位置し、網代駅より西方約2km



## 第1フェーズ 2010年4月～2011年3月



2010年から始まった「热海の森」の整備・再生活動。それは、真っ暗な森に光を入れるために、林内への陽光を遮断する不要木を伐採・整理することから始まりました。活動を開始した頃は、林床には下草も低木も生えておらず、昆虫や鳥などの生き物も見かけませんでした。コアボランティアのメンバーも増え、小型チェーンソーを導入したことによって、効率的に作業が進むようになりました。

## 第2フェーズ 2011年4月～2012年3月



急峻な地形の「热海の森」の活動に多くの人に加わってもらうためには、径路の整備が必要でした。林内で伐採した木を玉切りにして、階段を造るために有効利用しました。2011年秋からは、コアボランティア・メンバー以外の一般参加者を募って、除伐や径路づくりのイベントを定期的（しづおか森づくり県民大作戦の時期、年2回・春秋）に開催するようになりました。

## 第3フェーズ 2012年4月～2013年10月



除伐と径路整備が順調に進み、いよいよコナラやヤマザクラなど里山由来の落葉広葉樹を植える準備が整いました。2012年4月には第1回目の植樹イベントを開催、120本の植樹を実施しました。その後も4回の植樹イベントを開催し、これまでに合計560本の苗木を植樹しました。周辺森林に鹿の棲息が認められたことから、苗木1本1本に獣害ネットを取り付けて保護しています。

## 第4フェーズ 2013年11月～現在



適地での植樹作業が一段落したところで、時代に即した新しい里山のコンセプト「New Satoyama Paradise」の実現に向け着手しました。まずは、林内で伐採したコナラの中径木をシイタケ原木とし、駒うちと本伏せ作業をしました。今後は林内で発芽した埋没種子の実生苗の有効活用や、林内で採取したドングリからの育苗、その苗木をまた林内に植える活動につなげていきたいと考えています。